

【原 著】

現代の社会教育における「いのちのつながり」に関する
道徳性への追求

—今日のいのちの道徳教育を考える—

作田 澄泰 長谷 博文 中山 芳一

Pursuit to the morality about "the connection of the life" which can be put in the present-day social
education—Moral education of today's life is considered—

Kiyohiro SAKUDA, Hirofumi HASE, Yoshikazu NAKAYAMA

2017

岡山大学教師教育開発センター紀要 第7号 別冊

Reprinted from Bulletin of Center for Teacher Education
and Development, Okayama University, Vol.7, March 2017

原 著

現代の社会教育における「いのちのつながり」に関する道徳性への追求 —今日のいのちの道徳教育を考える—

作田 澄泰^{*1} 長谷 博文^{*2} 中山 芳一^{*3}

日本国憲法の施行と民主化に伴い、戦後の日本における学校教育において道徳教育の在り方も大きく変容した。しかし、親子関係、人間関係が原因とする学生たちの自死、不登校、いじめ、非行等の諸問題が後を絶たない。これらを解決するため、戦後の諸問題増加の背景にある今日の社会全般の道徳教育の在り方について検討した。諸問題に関わる大きな要因としては、大学生による「道徳性」におけるアンケート調査結果から「祖先を敬う」ことへの希薄化が明らかとなった。具体的には、祖先をはじめとする人とのつながりに関する道徳性の衰退が重要な課題であることが分かった。こうした課題を受け、親子関係に関する事例、先人からの伝統文化に関するインタビューを元にし、親子関係、家族関係、社会における命のつながりについて考察するとともに、具体的な社会及び学校教育における「真の道徳性」の在り方と必要性について示唆した。

キーワード：親子関係の不和、道徳性の衰退、命のつながり、真の道徳性

※1 早稲田大学教師教育研究所

※2 北海道教育大学釧路校臨床教育学研究室

※3 岡山大学全学教育・学生支援機構

I はじめに

明治以来戦前までは、道徳教育として修身があった。この修身以前により、孔子（紀元前 552 年 9 月 28 日 - 紀元前 479 年 3 月 9 日）による親子関係の思想が取り入れられるようになった。以下に示す内容は、葉という県の長官が孔子に言い、孔子が答えた論語の一説の内容である。

葉公（しょうこう）、孔子に語りて曰く、吾が党に直・躬（ちよくきゅう）なる者あり。

その父、羊を攘みて（ぬすみて）、子これを証す。

孔子曰く、吾が党の直き者は是れに異なり。父は子の為に隠し、子は父の為に隠す。直きことその中（うち）に在り。

と述べられている。この内容をみると、「私の村にはとても正直な者がいる。彼の父親が羊を盗んだとき、自らの父親を訴えたのである。」孔子はこれ聞いてこう答えた。「私の村の正直者というのはそれとは違う。父は子のために罪を隠し、子は父のために罪を隠すのである。本当の正直とはその心の中にあるものである。」

つまり、親子関係というのは、法律を用いるのがなじまないところがあるということなのであろう。また別の見方をすれば、親が羊を盗み、子がそれをお上に届けるなどという親子は、互いに尊重し合う

関係とは言えない。この親は「親をお上に売ってしまうような子」を育てたという意味で、罪は罪であるが、子育ての面において正しいこととは言い難い。孔子は親子関係には、子が親を敬うという崇高な尊厳があるべきであると論語において具現化している。¹⁾ 筆者（作田）は、この論語では今日の親子関係に情愛が欠落していることから、その情愛こそが真の「徳の道」であると考えた。

また、福沢諭吉(1882)『徳育如何』において、「道徳教育は国民の自主的な議論に基づいたものであるべきである」と当時の教育全般に対して反論し、儒教を批判する声も上がる中、徳育論争は長期間続いた。後に教育勅語(1890)が發布され、内容については、明治天皇が山縣有朋内閣総理大臣と芳川顕正文部大臣に対し、教育に関して与えた勅語であり、親子関係、家族関係、国家協力をはじめとする 12 項目の徳目が記されていた。しかし、1945 年終戦とともに、GHQ により、修身の廃止となり、新たな理性ある社会人を育てるものとして改めて復活したものが「道徳」であった。

戦後、今日まで続いてきた学校教育における道徳教育は、教科書が使用されるものではなく、資料の活用や講義形式が主となっていた。そして、数回にわたり、道徳教育をはじめとする学習指導要領が見

直されてきた。なお、現在の道徳教育では、道徳的
判断力、道徳的心情を中心として道徳的実践力を学
校教育全体で培うこととしている。しかしながら、
学校、家庭、社会における非行、不登校、いじめ、
自殺等の諸問題の深刻さは依然として増え続けてい
る。また、小・中学校、高校生を経て、社会に巣立
つ前と言われる大学生において、内閣府(2014)の調
べによると、“将来展望”に関する原因で自殺した大
学生(2009年～2014年)が過去6年間で、1018
人にのぼることが判明した。理由内訳の中には、「将
来への展望不安」「就職失敗」「学業不振」によるも
のがほとんどであった。その他には、「家族からの叱
責」「親子関係の不和」を直接的理由として42を示
した。しかし、この「家族からの叱責」「親子関係の
不和」を軸に全体との関連の組み合わせをみると、
双方とも「学業不振」「進路に関する悩み」「就職失
敗」などの「将来展望」が大きな原因とされ、全体
の約半数を占めることが分かった。「家族からの叱
責」の半数以上(52.2%)、「親子関係の不和」は将
来展望にまつわる自殺のうち42.1%)²⁾ また、最
近では、東京都にて15歳女子中学生が母を殺害す
る痛ましい事件(2016)が起きており、殺害理由は
娘の将来の展望に対する母からの叱責であったとさ
れている。このような課題をふまえ、今日の社会を
生きる若者たちにとって、親子関係、家族間におけ
る道徳の在り方に対し、嚴重に受け止めると共に、
人との関わりを重視した今日の社会及び学校教育に
おける道徳教育の在り方を根底から検討する必要が
ある。

II 今日の道徳教育の実践課題

戦後の道徳教育では、かつての修身とは違い、多
くの道徳的価値の内容項目を設定し、多面的な視点
から道徳の在り方を検討されてきた。各学校におい
ても、道徳的心情に重点をおいた授業研究が全面的
に成されてきた。特にリアリティある資料を題材と
し、自他の命の大切さについて、道徳教育における
補充・深化・統合を果たす取り組みが行われてきた。
筆者 作田がかつて実践した広島県内の小学校児童
第6学年 道徳授業(2010)においては、「命の尊さ」
について、理論では理解できているものの、「実感がわ
かない」という回答が約70%であった。しかし、2011
の東日本大震災における被害をメディア等の情報を通
して知ること、「命の大切さ」について真に捉え
ることとなり、我々人間にとって、「死」と隣り合わ

せであることが理解されていった。また、震災では、
多くの人々が失われ、多くの家族関係が一瞬にして奪
われた。その結果、心の奥底には、家族を失った心
の悲しみのみではなく、より一層の家族間の重さ
を感じられることとなった。こうして培われた道徳観
は、確かな道徳的実践力として生かされていくので
ある。そして、震災によって失われた家族で残され
た人々への「将来の夢は何ですか」という質問に対
し、「生きることです」という多くの回答が得られ、
あらためて命の尊さを物語ることとなった。こうし
た例を取り上げ、命の尊さにおける道徳的学びを行
うことが重要であり、道徳教育の基盤として取り組
む必要がある。なお、この点について田沼
(2013)は次のように述べている。「道徳的学び」とは、
生きていることを出発点として展開される道徳教育
において、様々な点として培った「生命」を収斂し、
統合的に意味づける「面としての生命尊重教育」の
役割を果たさなければならないことを意味している。
つまり、「死の人称」という視点から生命のもつ重み
をしっかりと捉えさせることができる道徳授業を行
うことを示しているのである。例えば、自らの死は
死ぬ存在である自分は捉えられないし、三人称の曖
昧な死は生命軽視の逆説的な風潮を生み出しかねない。
しかし、身近な他者の実感が伴う心揺さぶられ
る死を道徳授業で取り上げることで、かけがえのない
自他の生命の重みに気付いてこそ、生きとし生ける
ものの痛みを知るのである。³⁾ とあり、親子関係
における生命尊重に関する道徳授業を積極的に取り
入れることで、命のつながりと家族間の重要さを知
ることとなるのである。

一方、Iでも示した親子関係の衰退における大学
生の自殺の課題から考えられるように、「親が子を思
い、子が親を思う」という道徳心の浸透が成されて
いない現実がある。このような事態をふまえ、斎藤
(2011)、高木(2011)らにより、家族愛・郷土愛を中
心とした道徳授業の先行実践研究が行われ、家族愛
を中心とした道徳的心情の効果が成されている。ま
た、森本、滝沢(2008)により、「命の授業」について
述べられており、学校教育における道徳教育の方向
性について示唆されている。なお、弓田、竹山、近
藤(2009)において、高校生と教員の「命の概念」に
ついて述べられており、いずれにおいても、命の重
さが示す心の在りようが重要視されてきている。し
かし、学校教育では、多くの諸問題が後を絶たず、
今、「いのちと親子関係について考える真の道徳性」

が問われている。この真の道徳性についての研究については、先行研究としてはあまり、多く見られておらず、研究結果において、学校教育に大きな影響を与えるものと考えられる。

本研究では、大学生の道徳性におけるアンケート調査による道徳性における課題をふまえ、今後の学校教育における真の道徳性の在り方について検討した。なお、本稿の執筆にあたり、中山芳一がアンケート調査を行い、作田澄泰がインタビュー及び考察執筆、長谷博文が全体考察執筆を行なった。

Ⅲ 現代の大学生による道徳性から見えてくるもの

2014年6月に岡山県内のA大学3年生50名、2016年6月に岡山県内のB大学3年生を対象にし、「道徳性とは」についてアンケート調査を実施し、自分の考える道徳性について自由記述とした。本アンケート調査については、双方の大学より、アンケート承諾を得て実施した。A大学は、岡山県内の山間の自然豊かな環境に囲まれており、学習環境にあった立地条件である。しかし、人口密度は低い。B大学においては、岡山県内の都市部に位置しており、人口密度は高く、大学以外の人と触れ合う機会も多い。なお、アンケート実施において次の結果が得られた。回答結果について類似した内容については、抜粋したものを示した。

<A大学の学生による回答>

- ①自分だけの道をつくる。
- ②自分の信念をもち、覚悟して生きることが大切。
- ③体の成長とともに考え、行動も成長すること。
- ④判断し続けること。
- ⑤一生懸命考える。
- ⑥当たり前のことができる人。(あいさつ、支援、礼儀)
- ⑦自分の思うことを相手の意見を取り入れながら伝える。
- ⑧相手の立場に立って考える。
- ⑨責任や自覚をもつこと。
- ⑩他人を大切に、認め合うこと。
- ⑪出会い、人間関係を大切に。
- ⑫善い生き方であり、思いやりをもって他者を尊重し、認め合うこと。
- ⑬社会のルールを守る。
- ⑭皆が気持ちよく生活できる環境。
- ⑮社会的に助け合い、支え合いの心をもつ。
- ⑯社会的な広い視野をもって生きる。
- ⑰全てにおいて感謝の気持ちを忘れない心。

- ⑱全て人は人生の終わりに向けてどう生きていくのか、人としての意味を考えること。

<B大学の学生による回答>

- ①一般常識を備えつつ、かつ自分の良心にしたがって行動できること。
- ②人間として喜怒哀楽を感じるべき現象に出会ったとき、もしそれが他人に起きた出来事であったとしても、自分のことのように感じられる力。
- ③人があるべきだと考える在り方。良いこととは何なのか追求し続けること。
- ④自分自身の損得が計算ではなく、相手を思いやって何ができるのか、コミュニティ全体の幸福を考えるための概念。
- ⑤人間が守るべき最低限度のこと。
- ⑥肉体的にも精神的にも、他者を傷つけないようにする感情。
- ⑦人間としての善悪を社会の目などの世間体を考慮しながら考えること。思いやりとかマナーとか平等もこの部類だと思う。
- ⑧自分の言動に対する他者の心情を他者の立場に立って理解すること。
- ⑨国や地域、家庭など、所属する集団ごとで異なり、そこで養われるもの。自分以外の存在があって、はじめて生まれるもの。
- ⑩人として守らないといけないことと、思いやり、助け合いなどの人同士が共に生きていく上でもっとも大切な他との親和性。
- ⑪人の心の豊かさ、相手の心を考えることのできる力。
- ⑫法律などでは問題はなくても、倫理面やマナーなどの理由から、人がとるべき行動や考え方。
- ⑬人の気持ちを考え、思いやる心や他の人が嫌な思いをしないように暗黙のルールを守って行動すること。
- ⑭一般常識的なもの。
- ⑮人が「他者」を思って行動する際に発揮される性質。ある程度、天性によって決まるが、後天的に付け加えることもできるものだと思う。
- ⑯生きていく上で、人間的な振るまいをするために必要なこと。
- ⑰どれだけ相手や他人、周りの人のことを思って言動できるかということだと思う。
- ⑱相手の立場、状況、将来のことを考え、その相手のために何かすること。

A,B双方の大学の学生の回答を見ても、社会のル

ール、思いやり、礼儀等のマナーやモラルといった他者との関わりにおける価値が挙げられているものの、他者への深い道徳的価値となる命に関わる項目がほぼ見られない。また、前述の課題に挙げられる、家族愛についても言及されていない。確かに、アンケート調査全般から見られるように、社会ルール、モラル、規範意識、他者との関わりなど、どの価値についても重要な視点である。特に他者のことを思いやり、社会に対しどれだけ考えることができるか(B 大学-⑬⑭⑮⑯)という内容についても多く見られている。このことは、道徳性という視点からすれば、人の思いに深くふれ、他者との命のつながりに関する間接的な意味合いともとれよう。しかし、これらに関する価値については、直接的な生命との関わりを示すものはほとんど見ることはできていない。このように近代化が続く昨今、他者に対する深い愛を感じることができにくい社会となっているのが現実である。そして、間接的に生命とのつながりについては理論上考えることはできるが、生命に関わる意識自体については希薄化していると考えられる。つまり、こうした理論と現実との大きなギャップとなる点については、昨今の「豊かで恵まれた暮らし」による生命尊重に関する道徳性の衰退にあるであろう。

先に述べた生命尊重に関する道徳性については、低年齢時からの発達が重要であり、生命尊重の必要性について、濱野(2012)が次の点を明らかにしている。生命尊重の意識では、自分や身近な人の命、動物の命について、ほとんどの児童が大切にしなければならないと感じており、それに比較して、知らない人の命はどちらとも言えない、大切にしないでよいという回答が多く見られた。このことは、児童が身近な人と縁遠い人の命の大切さについて区別していることが分かった。⁴⁾ なお、この研究では、動物愛護に関する悲嘆を伴う死別経験による意識調査を行っており、生命尊重への意識や動物への態度に与える影響について明らかにしている。このように、死と向き合うことにより、自分自身が生かされていることに気づき、命の尊さに気づくこととなる。しかし、低年齢時においては、他者への生命の念は希薄化していることが分かる。この点について、A・シュバイツァーは、「生命あるものすべてには、生きようとする意志が見出される。この生きようとする意志は、自己を完全に実現しようとする意志である。すべての人が自己の生きようとする意志を大切にす

ると同時に、自分と生きようとしている他の生命をも尊重しなければならない。」と自他全てにおける生命への畏敬の念の重要性について述べており、当時のアフリカにおける戦時中での医療活動から培われてくるものであった。⁵⁾ このA・シュバイツァーが経験を通じて培った道徳性は、重要なカテゴリーの一つとして示しておくこととする。このように自他の全てが生きているという実感を得ることにより、命の大切さを初めて知ることになる。「命の大切さ」を知るとは、すなわち、「生」と「死」について改めて考え、自分自身の生き方について考えることである。そして、自らの命が親、祖父母をはじめとする祖先により受け継がれていることから、命の尊さを知る必要がある。

本研究における大学生による「道徳性」における意識としては、全体的に出会い、人間関係、社会のモラルといった自分と他者との関わりに関するキーワードも多く見受けられる。しかし、「他者との関わり」においては、親子関係、家族間における関わりとしてのキーワードは読み取ることができない。また、アンケートの紙面上では、多くの「他者との関わり」に関する意見があるものの、実社会での課題である親子関係不和、他者との関係不和といった諸問題が解決されていないのが現状である。この現状を改善するための方策として、筆者は特に次の点を挙げておきたい。

- (1)親子関係を尊重する家族間におけるコミュニケーションの充実
- (2)世代を超えた地域文化コミュニケーションの充実

IV 多面的な人との関わりにおけるコミュニケーションの考察

以下にⅢに示した3点について事例をもとに道徳性の原点について検討し、私たち人間が豊かな心を持ち、健全に暮らしていけるための方法について考察する。

1 親子関係を尊重する家族間におけるコミュニケーションの充実

まず親子関係においては、子が親を尊重できるような家族間の在り方を指しているものと考えられる。例えば、一日の中において、親子の挨拶や食事場面など、多くのコミュニケーションの場を取り入れる必要がある。また、休日等における親が子の世話をするなどの親子の関わり方により、子も親の背中を

見て育つこととなる。そして、子が親を敬い、親が子を愛するという親子の関係を明確に築きあげることが大切である。次の家族及び、家族間における事例を示し、コミュニケーションの充実の必要性を検討する。なお、事例1については、筆者が過去に勤務した家庭におけるもの、事例2については、大阪府に在住の他の社会人にインタビューして作成したものである。

<事例1>

Aは広島県内の人口約4万人の市に暮らす田舎の家庭に住んでいる。Aは幼い頃から母といる時間が多く、父は仕事に関わるのが少なく、ほとんど会話がなかった。また、祖父母は本人が幼い頃に亡くなっており、会話するのは母だけであった。時折、父が帰宅するが、中学生になったAは父への反発が多くあり、ほとんど会話が成されなくなっていた。そして、母への暴力へと発展した。

<事例2>

Bは大阪府における人口約80万人の都市部の家庭に住んでいる。Bは幼い頃から、祖父母、両親のもとで育った。しかし、中学3年生になると不登校となり、口を閉ざしてしまった。中学2年生までは、何事もなく学校に通い、問題等もなかった。このBは、3世代に及ぶ裕福な家庭で育ったが、家庭内での会話がほとんどなかった。

事例1の場合、母との会話が成されていたが、父との会話が少なかったため、家族全体としての愛が欠如していたものと思われる。また、祖父母を早くから亡くしているという現実があることから、究極の愛が欠如しているものと思われる。そのようなやるせない思いが、母への暴力という形で表れ、うまくコミュニケーションがとれない状態となっているのである。このような事例は、核家族化する今日では、よくみられる状況であるが、A本人にとって、家族間において、話すことのできる人が乏しいことになった。また、同世代においては、学校に行くことによって、関わりをもつことは可能だが、異世代を超えた関わりについては、中学生のAにとって、教師または、家族の人でしかなかったのである。仮に祖父母が存在しており、コミュニケーションがあった場合においてはどうかであったであろうか。思春期のAにとって、世代を超えた異コミュニケーション

ンにより、これまでとは違った価値が取り入れられ、心の安らぎへとつながるのではないだろうか。特に心の複雑さを増す思春期において、心の安定の必要性については重要である。祖父母からの何気ない一言の会話であっても、心に安堵を感じさせる場合もある。すなわち、世代を超えた人との関わりが如何に大事かを物語っている。また、両親から行ってきた姿をAは幼い頃から、五感で感じ取っているはずである。こうした、これまでの親の姿を子どもは確実に学習しているのである。つまり、この家庭では、子Aの姿に自ずと親の行ってきた姿が表れているのかもしれない。ゆえに、子どもが親を尊重するためには、親も自分の親を尊重することが重要であることは言うまでもない。その姿を子は見て育つのである。

事例2においては、裕福で祖父母にも恵まれ、何一つ不自由な家族のように思われる。しかし、祖父母との会話だけでなく、親子間の会話も成されていない。そのため子Bは、言葉を発しなくなり、何も理由を言わないまま不登校となった。親は「不登校になった原因が分からない」「何一つ不自由なく過ごしてきたのに」との言葉であった。多くの場合、このように原因が分からないと言う。しかしながら、原因は必ず、家庭にあると考えるのが自然である。何故ならば、家庭内から起こりえた課題であるからである。裕福な家庭であっても、子どもにとって、会話のない家族は決して満たされてはいなかったのであろう。つまり、親子間の会話成されていない結果、起こりえた状態である。これは、親が自分たちの親である祖父母に対し、尊重した姿が欠如しているが故に、その姿を子どもも学習していることが予想される。こうした、家族間におけるコミュニケーションの欠如に関する親子間の不和により、気づかないまま最悪の事態を引き起こすことも予測される。

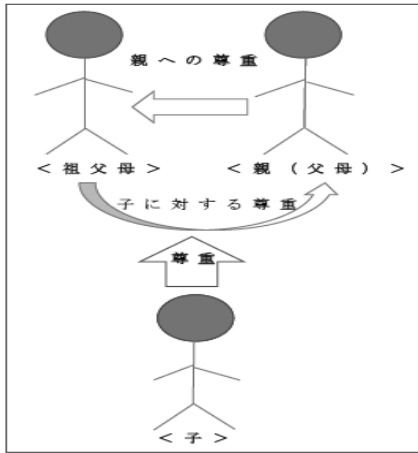
すなわち、子が親を尊重することで、また、子どももその姿を見て、親を尊重するようになる。そうすれば、さらに子の子孫も親を尊重するようになり、親子関係の正当な連鎖が続くようになる。この連鎖を筆者は、「豊かな家族づくり連鎖」と呼び、親が祖父母を尊重することを重視する。その姿により、子は上記の連鎖を心で学習し、親を思う心が構築されるのである。次に筆者はこれらの親子関係のモデルとして図1に示す。

また、図1のようなモデルが成立する理由として

次の点を挙げたい。まず一つ目に、祖父母を尊重する姿を見て育つことにより、安堵の心が抱かれるようになる。つまり、理想の親子関係のモデルが自分の住む家庭内に存在することにより、心が落ち着けるようになるのである。そして、子は祖父母を敬い、親をも尊重するようになる。この姿が、次世代へと続き、さらに連鎖を続けるようになる。

二つ目は、図1のモデルによって、子が親を思う心を培い、心の中に生命のつながりである畏敬の念を抱くことにある。こうした、祖先からのつながりを実感することで、今の自分の命は自分自身で生きることができているのではなく、紛れもなく、親子関係の連鎖によって長い歴史の中で創り上げられてきたことを認識することが重要である。

図1 「豊かな家族づくり連鎖モデル」



2 世代を超えた地域文化コミュニケーションの充実

地域文化の代表として神楽における伝統文化の継承について取り上げ、世代を超えた地域文化におけるコミュニケーションの充実と必要性について考察した。考察にあたっては、筆者（作田）の住所地である広島県福山市内における地域の伝統神楽を継承しようとする理由について世代別神楽団員にインタビューした。結果内容については、以下の通りである。なお、以下のU氏とS氏は同じ町内ではあるが、異なる地域の神楽団に所属している。

～何故、神楽を続けようとするのか～

<U氏へのインタビュー（50代後半）>

まず、一点目として文化芸能を次世代につなげていくためである。自分がこれまでに教えて頂いたことを次に繋げていくためである。また、世代別の人

たちとのコミュニケーションの場となる。なお、神楽を演ずるための過程におけるコミュニケーションが必要となるからである。そして、「神楽」という文化芸能は特異性のあるものであって、祭りにおいて発表していく場にもなる。技能の習得の場が発表を通じて各自の自信にもつながり、神楽独自の良さを感じることができる。

次に、神楽を習ってきた過程において、先代から受け継いできたものを次につなげていこうとする思いがある。うまく神楽を演じることができるよう伝えていくことで、個々への達成感と喜びを感じ取ることができる。このような思いが抱かれる理由として、今日の社会の中で希薄化されているコミュニケーションに対し、「人を気づかう気持ち」が欠如してしまう。よって、伝統神楽によるコミュニケーションの充実により、感性を育てることが重要である。何故ならば、前の人から教えて頂いた恩恵を次世代へとつなげることが大切であるためである。こうした、次世代へのコミュニケーションを通じたつながりによって、他者への感謝と畏敬の念を感じ取ることができる。これは、「心の豊かさ」としての人間社会のあるべき姿であると思う。

<S氏へのインタビュー（30代前半）>

アーノルド・トインビーという歴史学者がその著書の中で「自国の歴史（神話）を学ばない民族は100年で滅びる」と言ったとか言わないとか。僕自身、その本を読んだわけではないので真偽は不確かだが、この言葉自体は真実を表していると思う。仕事で外国人と交流する場合、まずお互いが慣れるまでの間は家族の話や自国の近代史や神話が主に語られることが多く、とりわけ神話の威力は抜群で、日本の歴史が始まって（神武天皇が即位して）今年で2676年であること、神武天皇の即位は神話の中のおよそ中間点で、さらにそれ以前にも神代の神話があることなど、日本という国の神話を説明すると、外国人はその奥行きに驚く。

常日頃外国人と付き合うわけではないので、多くの日本人にとって神話を知ること（語ること）のメリットは、我々の日常生活で活かす知恵が物語の形で分かりやすく伝承できることにあるのではないかと考える。

たとえば国生みからは、重大な決断は男性が行うこと。神生みからは、火の恐ろしさ、出産の危険さ。八岐大蛇伝説からは、河川の氾濫の恐ろしさと、そ

れを管理していく術。天岩戸の話は、個々の得意分野を集合させて目的を達成すること。大穴牟遲神は親切な心は味方を増やし、兄神からの虐めに耐えて自分を鍛えて強くすれば、相手に逆襲できるんだということを教えてくれる。また、日本各地の地名の由来が神話まで遡ることを知れば、たとえば市町村合併で由緒ある地名が合併により「西福山市」やカタカナの地名になって消えていくようなことは起きないはずである。

このようなことは、他人（親や祖父母）から聞かされることが入口だと思うが、そこから深く学習しようと思うと、やはり興味をもつことが有効である。興味をもつにはそれに触れることが一番効果的だと思う。僕が育った地域では昭和 30 年代ころ（一時中断して復活したのが昭和 30 年代なので、中断前の歴史は不明）から続いている神楽が「それ」だった。主に古事記の伝説を舞で表現したもので、古事記の行間に散りばめられた古代の智慧までは表現できないし、古事記のすべての話を演目としてもっているわけではないが、子どもたちは神楽を見ることで、10代～20代の若い人は舞うことによって神話に対する興味のきっかけとなって、先人の知恵にも触れてもらいたいと思う。また、自分の子どもたちにも古代の智慧に触れて、見識の高い人間に育って欲しいと思うので、年をとって舞うことが難しくなりつつあるが、あと3年くらいは続けようと思う。

以上のように、U氏においては、具体的な祖先とのつながりの大切さを感じ取ることができているのに対し、S氏においては、先人とのつながりについて感じとりつつはあるものの、現在では「あと3年くらいは続けようと思う」とあり、次世代につなげようとする意識がやや弱く感じられる。また、伝統神楽が受け継がれてきた歴史や神話の面白さについての関心が強く見られ、日本国民の生命の始まりを神の行為のものとした見方・考え方となっている。しかし一方では、自らが次世代に継承していこうとする姿が弱く感じられる。これは50代の後半であるU氏と比較すると、20代、30代とは異なり、神楽の技能の習得と先代からの継承を通じて、次世代へつなげようとする心が培われていることになる。なお、上記のU氏のインタビューにもあるように、次世代へのコミュニケーションを通じたつながりによって、他者への感謝と畏敬の念を感じ取ることができるのである。つまり、「生きている」という概念

ではなく、「生かされている」という道徳心が抱かれるものと予測される。また、年代を経た神楽における他の人々とのコミュニケーションにより、多くの人とのつながることの大切さを学びとることができると思われる。そして、今日の自分たちが生かされてきている命の大切さとつながりの尊さを知ることとなるのである。すなわち、異なる家庭と地域の世代を超えた人々であっても、伝統文化を通じたコミュニケーション行為により、先代から受け継がれていることへの尊厳と畏敬の念を感じとり、次世代へ受け継ごうとする心が培われていくこととなる。こうした他の人とのつながりから、自分の命がつながっていることへの大切さを知ることとなる。そして、今の自分の命が祖先から受け継がれていることから、現在の自分の命が存在していることを知ることとなるであろう。

V 社会教育における「人とのつながり」に関する道徳教育の意義

IVで考察した通り、家族間におけるコミュニケーションと世代を超えた地域文化コミュニケーションの充実により、自分自身の存在意義を知ることができる。すなわち、無数の祖先によって、今の自分の命が受け継がれてきていることを知ることによって、命の尊さを実感することにもなる。さらに遡れば、想像もできない、まさに神の領域である祖先に辿り着くことにつながり、元の間人社会における生命においては、一つのものから始まると言っても過言ではないであろう。

生命の起源については以下のように述べられており、大別すると三つの考え方が存在する。一つは、超自然現象として説明するものであり、一例を挙げると神の行為によるもの、とする説である。第二は地球上で科学的に進化したとする説である。第三は、地球外に起源があるとする説で、パンスペルミア説と呼ばれる。現代でも、第一の超自然現象説や第三のパンスペルミア説を発表する学者は多い。(自然科学者の間では) 一般的には、オーバーリンなどによる物質進化を想定した仮説が受け入れられているとされる。⁶⁾ しかし、我々の祖先を遡って考えると、人類の生命の始まりは、ひとつのことから始まったとするのが自然である。そう仮定すると、我々の生命は元はひとつであって、人類の各々の祖先は皆、ひとつの同じ存在であると考えることができる。ゆえに、皆の命は互いにつながり合っていることに気

づいていくであろう。すなわち、伝統文化である神楽を通じてコミュニケーションを充実させることにより、伝統文化が祖先から受け継がれていることを実感し、「今日生かされている命」の尊さを知ることとなるのである。

また、家庭においては、子どもが祖先を敬う姿を見て育つことにより、図1に示す「豊かな家族づくり連鎖モデル」を創り出すことができる。そうすれば、子は親を敬い、親も子を慕うようになる親子関係が成立する。そして、地域社会においても、こうした祖先から次世代に対する、言わば、親から子へのつながりによって、祖先の残してくれた文化を実感することとなる。また、たとえ、異なる家庭や氏名であっても、時代を遡った祖先たちの力により、今日まで築き上げられてきた社会を守るための使命感が抱かれることとなるであろう。

図2 生命の家族間、伝統文化のつながりに関する認知モデル

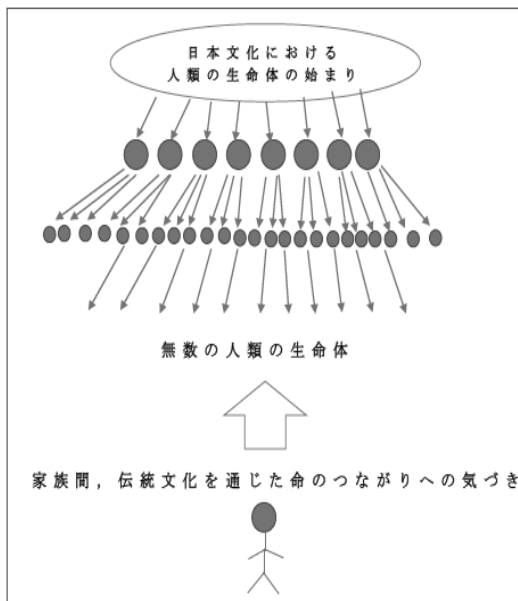


図2のように伝統文化活動を通じて、先代から文化が受け継がれている重要性を知るとき、自分自身の命をもつながりによって受け継がれていることを悟ることとなるであろう。そして、自分自身の命が生命の始まりによって「この世で生きている」のではなく、「生かされている」という実感を得ることにつながるのではないだろうか。また、こうした「生かされている」という実感を得ることができるとき、自分たちが先代から与えられたことを次世代につなげようとする心が抱かれてくるものと思われる。

本インタビューの伝統文化における神楽を行う主

旨としては、「地域の氏神様に一年間の生活に関する感謝の祈りを込めて、祭りの際に神を奉るために行う神事」であるとされている。20代の神楽団員においては半信半疑の思いの者が多く、やがて、30代、40代になるにつれ、地域の遠い祖先である神のために感謝を贈る思いが培われていくようである。はじめは、地域の先輩から誘われた神楽であっても、神楽を舞うことを通じて、地域とのつながりや先代からの思いを体全体で会得することとなる。そして、前述した通り、「生かされている」という目には見ることでできない遠い祖先である神の存在を知ることになるであろう。それはやがて、言葉には表すことはできないが、紛れもなく、生命の始まりである神の存在への畏敬の念を会得することにつながるであろう。こうした命のつながりによって、文化は次世代へとつながれなくてはならない。しかし、今日では、こうした伝統文化は衰退をみせ、ほとんどの文化が無くなるようにしている。このことを例えると、先代から受け継がれた命そのものが次世代へ受け継がれることなく、言わば、死へとつながっていると言えるのではないだろうか。今日のような問題を鑑み、伝統文化の衰退が命のつながりの衰退に大きく関係していると思えてならない。

VI 親子関係と異年齢の人とのつながりを重視した道徳教育の創造と今後の課題

IV、Vで述べたように、異年齢の伝統文化の継承により、いのちのつながりに関する道徳的心情が培われることが予測される。しかし、勿論のこと年代による道徳性の発達とは異なり、年代が重なるにつれ、命のつながりに関する道徳性は高まるに違いない。だが、こうした道徳性を次世代につなげていくためには、先代から受け継がれた文化を確実に会得し、神から頂いている命のありがたさに実感しなくてはならない。この命のありがたさを実感して初めて、次世代に文化を残すことができる。このような伝統文化による命との関わりに関するシステムは、同家族である親子関係においても、重要な成果が表れるものと予測できる。親子関係については、そもそも、親なくば必ずその子は存在することはない。結局当たり前なことではあるが、それだけにあまり深く考えることのないことである。「あなたの高祖父の名前は？」と聞かれてすぐに答えられる人は極めて少ないであろう。しかし、その方の命と生活（結婚・子育て）によって、今の我々の生活があることを考え

た時、先人への敬意と感謝をもって生きることが「人の道」であり、他の動物と人が姿を違える所以であろう。そして、この「人の道」を意識して生活する中で、「このようなことは親が悲しむ」「このようなことは親が喜ぶ」という行動の基準が芽生えるようになるのである。また、人は案外に自分のためには行動しづらいものである。例えば、主婦は自分だけの食事ならあまり料理に手をかけず、食事を抜くかも知れない。ところが、主人のため、子どものため、姑がいるから頑張って料理をしようとする。このように、主婦に限らず、人は「誰か」のために動くのである。つまり、この「誰か」のいない人間が自暴自棄となり、犯罪を犯したり、自死したりするようになると思われる。よって、前述した「人の道」を人々に伝え、広めることが諸問題の解決へと導く道標となるであろう。そして、人に教え、伝えるためには、まず自分が意識し、実践することが肝要であろう。そして、このことこそが真の「道徳」につながるのではないだろうか。

これまでに述べた内容について、学校教育、家庭教育をはじめとする、社会における地域活動を通じて、まずは、文化の体験をすることが必要であろう。例えば、地域での夏祭り、運動会、その他様々な伝統文化活動に地域、学校、家庭が共に一つとなって参加することで、世代を超えたコミュニケーションが行われる。特に学校と地域は密接に連携し合い、文化の継承に向けた命のつながりに関する道徳教育の推進を充実すべきである。内容においては、体験的かつ、実践的な内容を積極的に取り入れ、年代を超えたコミュニケーションを図ることが大切である。そして、何よりも重要な点は、何故、伝統文化を継承する必要があるのか、その意味を理解し、次世代に伝えることである。このような道徳教育を特設道徳の時間のみではなく、総合的な学習の時間、その他の教科を活用し、年代を超えた命のつながりを確実に各々の心に浸透させていくことが重要なのである。そして、何故、先代から今日に至るまで文化が継承されてきたのか、先代の人々の思いにふれ、その心を受け継ぐことが必要である。西田幾多郎(1870-1945)は、『人間の最終目標は各々が生まれ持つ天性自然の花、「人格」という名の花を咲かせることにある。それは決して失われることのない芳香を湛えた、どれだけの時を経たとしても決して散ることのない、真に人を感動させる力を持った「心の花」であり、自分らしい花を咲かせることである。』

7) と述べており、生命の偉大さと生涯における尊さについての意味と解される。つまり、伝統文化を継承することにより、命の尊さを知ることから、自分だけの人格をも創り上げることとなる。このことは、個々に異なる人格における崇高な生命尊重を意味するものである。

また、前述した伝統文化に関わるアクティブラーニングによって得られた道徳性は、確かな道徳性として心に浸透し、自分自身の命が長い年月と想像もできない確率による命のつながりによることを知ることとなる。こうして得られた命の大切さは言葉では表現できないほどの崇高な道徳的実践力として今後の実生活に生かされていくに違いない。ただ単に、教師が主導となる、言わば「教え込み型」であっては、児童生徒が主たる目的をもち、人とのつながりである命の尊さについて学ぶことはできないであろう。あくまでも教師をはじめとする社会における大人たちの使命は、児童生徒たちが自ら主体的に伝統文化から命の大切さについて学び、各自の命を次世代につなげようとする心を培うことにある。このような心が培われれば、子は親を尊重し、親は子を慕うようになるはずである。これは、本来の親子関係の在り方を示すものである。しかし、今日の社会では、この親子関係をはじめとする、異世代間における尊厳が損なわれつつある。まさに、若者たちが年輩の人たちを侮っている面も多くみられるのが現実である。年令ではなく、能力主義と叫ばれる今日だが、如何なる能力が進もうとも、Iで述べた孔子の言う、子は親を敬う心は、地球上の生命体全ての姿を指しているのではないだろうか。そして、この生命のつながりの意義について道徳教育を確かなものとし、学校、地域、家庭が一体となり、真の命の尊さを培うものでなければならない。地域、家庭連携に託された学校の役割は重要であり、児童生徒自らが、「文化を次につなげなければならない」と思える道徳教育を行うことがこれからの課題である。そのためには、教師の道徳教育の研究は、スキルや形態のみに捉われることなく、教師自らが道徳的価値への多面的な見方・考え方をもち、児童生徒に真の道徳性を習得されるための教育を目指すことにあるであろう。こうした意味においても学校における教師の職責は大変重要であり、今後の道徳教育における研究と実践においては、真に向き合う姿勢を願う。

参考文献

- (1)小嶋佳子『道徳性の発達支援—心理学的知見の活用—』愛知教育大学研究報告 教育科学編 65, pp.117-125, 2016
- (2)中山和彦『「特別の教科 道徳」は、児童生徒の人生に生きて働く道徳性の育成を可能にするか』白鷗大学論集 30(2), pp.107-130, 2016
- (3)船木祝『「人格の内なる人間性」についてのカントの思想形成:「個人」の道徳から「社会」の道徳へ』札幌医科大学医療人育成センター紀要 (6), pp.9-16, 2015
- (4)多田想能美, 池田誠喜『道徳的行為生起モデルに基づいた道徳の時間の実践的研究』鳴門教育大学学校教育研究紀要(30), pp.45-54, 2015
- (5)渡辺満『中学校の道徳教育において〈いのち〉の教育をどのように実践するか(1)』岡山大学教師教育開発センター紀要 6, pp.106-112, 2016

引用文献・註

- 1) 山本七平『「空気」の研究』文春文庫, 1983
- 2) 佐藤裕一『大学生, 6年間で3千人が自殺! 主因は将来展望への不安, 家族による叱責は危険』Business Journal, 2015, URL:<https://gunosy.com/articles/Rha79>, 最終閲覧日 2016.10.13
- 3) 田沼茂紀『道徳教育充実に向けての問題把握とその解決のための課題』「光り輝く『教育立県ちば』を推進する懇話会」(第2回)配布資料 2013
- 4) 濱野佐代子『小学生の対象喪失の悲嘆経験と動物への態度との関連:生命尊重の教育に資するため』帝京科学大学紀要 8, pp.93-99, 2012
- 5) 菅野覚明他『用語集 倫理 新訂第2版』清水書院 202頁「生命への畏敬」, 2016
- 6) 今堀和友他『生化学辞典』東京化学同人, 2007
- 7) 『哲学者 西田幾多郎のことば』URL:<http://matome.naver.jp/odai/2135293800499874701>, 最終閲覧日 2016.10.13

Pursuit to the morality about "the connection of the life" which can be put in the present-day social education—Moral education of today's life is considered—

Kiyohiro SAKUDA*1, Hirofumi HASE*2, Yoshikazu NAKAYAMA*3

(Abstract)

The state of the moral education was also changed big in a postwar school education in Japan with operation of the Constitution of Japan and democratization. But there is no end to self-death of the students a parent-child relationship and the human relations make the cause and the miscellaneous problems which refuse to go to school and spite and are misconduct. The state of the moral education of today's social in general who has that in a background of postwar increase of miscellaneous problems was considered in a point to settle these. Rarefication to "An ancestor was respected." became clear from a questionnaire survey result in "morality" by a college student as a big factor of miscellaneous problems. Specifically, I found out that a decline of morality about the connection with the person such as an ancestor is an important problem. I received such problem, used an interview about a case about a parent-child relationship and traditional culture from a pioneer as a capital and considered about the connection of the life in the parent-child relationship, the family relation and the society as well as suggested it about the state of "true morality" and necessity in society in detail and a school education.

Keywords: A feud of a parent-child relationship, Decline of morality, The connection of the life, True morality

※1 Waseda University institute of teacher education

※2 Department of school education, Kushiro Campus, Hokkaido University of Education

※3 Okayama University whole school education and student support organization